

災害エスノグラフィーによる南阿蘇村の食料事情調査 Disaster Ethnography of Food Situation in Minamiaso

守真弓¹、守茂昭²
Mayumi MORI¹ and Shigeaki MORI²

¹ 特定非営利活動法人高度情報通信都市・計画シンクタンク会議

Telecom-Society Corporations and Planners

² 一般財団法人都市防災研究所

Urban Disaster Research Institute

要約

被災地域の食料事情に関する情報を収集し防災に役立てることを目的として、2016年5月30日および6月1日に熊本県南阿蘇村にて災害エスノグラフィーによる調査を行った。対象者は南阿蘇村役場の職員で避難者の食事対応の担当者4名、ボランティア組織の代表者、ホテル売店員をしていた立野地区在住者1名、およびホテルの従業員2名である。インタビュー内容を録音し、テキストに起こした。テキストは、1) 内容ごとの発言ブロックに分け、2) 各ブロックにフラグを付けて分類した。熊本地震の被災地は広範囲にわたったが、南阿蘇村は主要道路が寸断されたこともあり被災直後は一時孤立状態になった。この状態で食料調達を担ったのは村役場の男性職員であり、避難所に集まった住民の要望を汲みつつ毎日の食事を提供し続けた。また、発災直後に南阿蘇村に入ったボランティアがこの地域の食支援を行っていた。

キーワード：熊本地震、災害エスノグラフィー、食料調達、避難所

Summary

Purpose: To utilize collected information on the food situation in disaster stricken district, survey by disaster ethnography was conducted on March 30, 2016. **Method:** The survey respondents were four officials of Minamiaso village office who were in charge of meals provided to the evacuees, a leader of a private volunteer organization, a resident in Tateno area who worked at a souvenir shop of the Hotel Greenpia Minamiaso, and two hotel employees. Documentation was performed from the recorded contents. The text was analyzed by 1) dividing into speech blocks, and 2) attaching category flags and sorting the speech blocks. The 2016 Kumamoto Earthquake damaged a wide range of area in Kumamoto prefecture, and in Minamiaso, the traffic was cut off at places along a main road. Immediately after the earthquake, the village was temporarily isolated. In this status, the village officials purveyed food and supplied daily meals for the villagers gathered in evacuation centers. Further, the leader of the private volunteer organization, who entered Minamiaso conducted eating support in this district.

Keywords: 2016 Kumamoto Earthquake, disaster ethnography, purvey, evacuation center

1. はじめに

南阿蘇村における食料事情の調査について報告する。

熊本地震（平成28年（2016年）熊本地震）では、2016年4月14日に熊本市で最大震度7（マグニチュード6.5）の地震が発生した¹⁾が、4月16日には、さらに規模が大きい地震（最大震度7、マグニチュード7.3）が発生した²⁾。南阿蘇村では4月14日の震度5弱（熊本県阿蘇）、4月16日の震度6強（熊本県南阿蘇村）の地震により、主要道路である国道57号線が崩壊し、阿蘇大橋が崩壊し、土砂災害で通行止めとなった。また、県道熊本～高森線の俵山トンネル崩壊、土砂災害のため通行止め、県道河陰～阿蘇線の土砂災害および道路面崩壊のため通行止めとなり³⁾、一時孤立状態に置かれた。

このように交通が破壊された被災地の被災直後の食料事情を探ることにより、今後の防災や備蓄に活かしたいと考えた。

緊急事態発生より1月半ほど経過した5月30日に南阿蘇村を訪問した。この村で支援活動を行っているボランティア組織の代表者に会う約束ができたためであるが、この人物を通じて、孤立した村での食事対応にあたった村役場の職員の協力を得ることができた。

被災者への食事提供については、被災直後は村役場および上記のボランティア組織が共同で行い、その後支援対象が分かれている。村役場は主として避難所での生活者および避難所へ食事を求めて来た人々に対して食支援を行った。ボランティア組織は在宅被災者を含む、避難所以外の場所にいる人々に対して食支援を行った。

さらにホテルグリーンピア南阿蘇でもインタビューを行った。売店で働いていた立野地区の住民の女性とフロントの男性である。ただし売店の女性の発言は店内で話を伺ったため録音は行えずノートに記録しているのみである。

責任著者：守真弓

E-mail: busybird@nippon.email.ne.jp

2016年10月26日受付；2017年1月26日受理

Received October 26, 2016; Accepted January 26, 2017

7月28日に再度南阿蘇村を訪問し、同じ対象者に面会して事実確認を行った結果を合わせて整理した。さらに、7月29日にホテル管理者にインタビューを行った。

本稿で示す南阿蘇村の状況からは、過去の災害でも指摘されてきた食の問題、食支援の可能性および限界について示唆が得られたと考えられる。

2. 方法

災害エスノグラフィー⁵⁾と呼ばれる方法に基づいて、分析レポートにまとめるため、インタビューを録音した。

対象者

南阿蘇村役場農政課の職員4人の男性（農政課M氏、K氏、I氏、A氏）、ボランティア組織のリーダー（T氏）、ホテルグリーンピア南阿蘇の売店の女性（ホテル売店女性）、フロントの男性（ホテルフロント男性）、およびホテル管理者の男性（ホテル管理者男性）の協力を得ることができた。

調査の実施

調査は2016年5月30日から6月1の3日間にかけて行なった。最初に、久木野中学校体育館で村役場農政課の職員に面会した。次にボランティア組織の本部となっていた喫茶店を訪問した。ホテルグリーンピア南阿蘇では売店の女性に店内で話を伺った。フロントの男性には都合の良い時間を教えていただき、フロントでインタビューに応じていただいた。2度目は7月28日から29日の2日間で、同じ久木野中学校体育館およびボラン

ティア組織本部の喫茶店を訪問した。また、ホテルグリーンピア南阿蘇の管理者の男性にはロビーでインタビューを行った。ホテル売店の女性を除く全員の発言は了解を得て録音した。

トランスクリプション

録音データは、逐語ベースでテキストに起こした。

ある程度読みやすくするため、テキストのうち、言いよどみや、「ええ」などの感動詞の削除、意味が不明瞭な表現の補完を行なった。

3. 分類

各対象者のインタビューテキストを発言のまとまり（ブロックとする）ごとに区切り、フラグを付けて整理した。

フラグは2段階とした。

第1段階として災害食（被災生活）に関する一般的な調査項目に該当するようなフラグとして、インフラ、避難、備蓄、食事、調理とした。第2段階としては、被災時の食の入手に関する分類項目に該当するフラグとして調達、仕分け・搬送、ニーズとのマッチングとした。

南阿蘇村では、発災から約1週間停電していた。九州電力が電源車による給電を4月20に開始している³⁾。この日から5月23日までの34日間（約1か月）が公的な炊き出し時期である。公的な炊き出しが終了して、一部を除き避難所が閉鎖となった。

以下は各テキストを段階ごとにまとめたものである。

表1 各テキストの段階別の要約

	南阿蘇村役場農政課M氏、K氏、I氏、A氏	ボランティア組織T氏	ホテルグリーンピア南阿蘇売店の女性（売店の女性）	ホテルグリーンピア南阿蘇フロントの男性（フロントの男性）	ホテルグリーンピア南阿蘇管理者の男性（管理者の男性）
4月14日～19日（停電）	対策本部設置。農政課は食事担当に。避難所に人が集まる。持ち寄り、農協、店舗の協力でのぐ	16日に熊本で本震、直後に南阿蘇支援を決める。おにぎり、パンの支援	自宅（立野区）は無事だが断水。ホテルの厚意で宿泊。停電で売店の肉がダメになってしまった。	自宅におり出勤できず。ホテルでは関係者が泊まり込んだ。水源はある。調理はできなかったのでは。	職員はそのまま滞在。宿泊客は朝食後帰る。食材あり、料理長がいて食事は普通にできた。消防と自衛隊に場所提供。
4月20日～5月23日（炊き出し）	自衛隊による炊き出し支援に1本化。資材、食材調達に苦勞する。メニュー作成。	避難所の外の支援に回る。	親戚の家に滞在、南阿蘇に戻る。ホテル滞在。	営業再開してから行政とボランティアが多く宿泊している。	電気が回復し早期から営業再開
5月24日～	一部を除き避難所閉鎖。		水道が回復せず自宅で生活できない。	村の負担で被災者16世帯が滞在。	7月は13世帯に減った。8月には10世帯に。

4月14日～19日（1週間の停電期間）

【南阿蘇村役場（農政課）】

4月14日の発災直後、村役場では夜中に課長クラスに召集がかかり会議が行われた。夜明けと同時に調査報告が始まった。14日から避難が始まっていたが、この時は「自主避難というかたちで食事は持ってこられた」（農政課M氏）。

16日の本震の後の対策本部では、再び課長クラスが集められ、各対応ごとに担当する班が作られた。「いろんなところで私たちが担当したのが、私が教育委員会で、

農政課なんですけど。私たちのほうはもう物販を運ぶというかたちで、食事とかいろんな物資が入ってきた分を、何が足りませんよというような避難所に持っていく係というかたちでした。」（農政課M氏）

16日以降は正式な避難所として役場が対応することに決まり、避難者が集まった。「食事ですね。水も来ない、電気も来ないという状況で。」（農政課M氏）

村では災害に備えた食料をあまりしていなかったという。「一応、住民福祉課のほうで避難所の緊急対応ということで、長期保存の水とか、乾パンであるとか、そう

いうのは、どうでしょう、20食とか30食程度ですよ。その程度の避難所1カ所に対してそのくらい程度の備蓄しかなかったし。」(農政課K氏)

備蓄がわずかであったにも拘わらず農政課は食事対応を迫られた。M氏によると、「私がいた庁舎の避難所では、職員が余った米を持ってきたりとか。あと、お店も一部出してくれる部分もあったんで、そういったものを買出しに行ったりとか。」上述の住民福祉課の非常食に加え、「地元の婦人会さんとかですね、地元によつぱりその、家にあるだけの食事を持って来てくださいちゅうことで」食糧を集めた。

「水は、私がいた避難所は水源が近くなので水源とかから汲んだりとか。」(農政課K氏)

調理器具としては、プロパンで炊く器具を農協等に手配し配置した。こうして、ライフラインが完全に停止している時期をしのいだ。

【ボランティア組織】

ボランティア組織のリーダーT氏は、阪神淡路大震災の被災者であり、避難者のまとめ役を務めて以来、全国の被災地で活動して来た人物である。発災後熊本市に駆けつけたT氏は16日の本震を体験し、ただちに南阿蘇村の支援を決意している。

T氏によると、福岡の団体の協力を得ておにぎりを届ける支援を行った。農免道路を使い、福岡から日田(大分県)を経由して阿蘇に入った。

「この阿蘇に入ってくる道路がすべて駄目になったんです。そうすると、もう日田を経由しないと入ってこれないですよ。だから、福岡から日田経由で行くと、だいたい軽いときで3時間半、荷物が重かったら、やつぱり4時間ぐらいかかる。それを毎日往復してましたからね。」

「朝8時に、おにぎりを8時までに集めるわけですよ。で、各お母さん方が120～130人集まったんですかね。そういう人たちが集会所とかそういう施設で調理の施設があるようなところで全部おにぎりをつくって、それを集結場所に持ってくるわけですよ。で、数を数えて。で、行政のMさんに「今日は何個行きます」と数を報告して、「じゃあ、今からおにぎり200、パン200はずっと提供してくれたんで、それを持っていきますから」ということで、連絡して、僕は昼頃に入りますよ。」

T氏は各地に協力団体があるため、大量の食支援が可能であった。

「僕らが提供させてもらったのは、19日から、おにぎりが1000個。多い時は1500個ありましたね。1日。2個入りが1000。2個入りです。それからパンが200です。2個1パック。それが、200食です。19日から、それが毎日。南阿蘇の配送センター(道の駅「あそ望の里(あそぼうのさと)」に自衛隊の配送部隊があった)に届けたんですね。(5月)23日まで。」

【ホテルグリーンピア南阿蘇】

このホテルはもともと国の施設を村が買い取り、それを株式会社南阿蘇カントリークラブが引き継いだものである。この時に、不備があったという非常用発電施設をカットしてしまった(管理者の男性)。したがって発災直後は停電となり、水をくみ上げるポンプも電動のため機能せず、ガス設備は電気弁を使用しているため機能しなかった。

宿泊客に朝食のパンとドリンクを提供して、帰っても

らうと、従業員がそのまま滞在した。

売店の女性は立野地区の住民で、子供や孫は県外にあり、独り暮らしである。隣近所の家屋が全壊したが自宅は無事であった。だが水道が使えないため生活できなくなった。この女性は一時期は県外の親戚の家に避難し、また南阿蘇へ戻った。「自宅にいるより安心だということで」(ホテルフロント男性)、ホテルの厚意で滞在することになった。

ホテルに残っていた従業員の中に料理長がいたため、食事は「通常のものに近いもの」(ホテル管理者男性)であった。「コース的じゃないけど、一品みたいなもの。どんぶりとか。そういうもので、食べることは食べてました。被災者の方みたいな、おにぎりとか味噌汁とか、そういうものではなくて、普通に食べれたみたいなかたちではあるんですね。」(ホテル管理者男性)

ホテルにはプロパンガスの設備があり、またこの地域には豊富な水源が多数あるため、汲みに行き、洗い物もすることができたためである。「水が無いというよりも、ポンプが止まっていたから出なっただけで。水源は近くにありますから。」(ホテルフロント男性) 食材は備蓄されていた。ホテルでは自家牧場の肉を扱っており冷凍品が売店で販売されている。この肉が停電のため保冷できず溶けて行く事態となった(ホテル売店女性)。そこで本社から冷凍車が来て商品を回収して戻った。

停電の間は営業することができなかったが、消防と自衛隊に寝泊りする場所を無料提供した。「営業はできませんでしたので、体育館とか、宴会場のスペースを消防と自衛隊の方がお使いになった。あちらは電気も水も必要ないぐらいに持ってこられますからね。ですから、場所だけ提供していました」(ホテルフロント男性)。

4月20日～5月23日(炊き出し)

【ホテルグリーンピア南阿蘇】

4月20日には電気がほぼ復旧する。「電力車(九州電力の電源車³⁾のこと)が。各地から来てたようですがね。その後、ある程度回復しました。」(ホテルフロント男性)

「電気が来れば、うちは営業ができた。あとは清掃とかその辺が、ぜんぜん片付かなかったというところですね。従業員も被災していたものですから。」(ホテル管理者男性)

ホテルグリーンピア南阿蘇は4月23日から営業を再開した。「営業を再開してからは、行政の方とボランティアの方のお泊りは多くなりました。」(ホテルフロント男性)

上述のように、自衛隊はすでにホテルで寝泊りするスペースを確保していたが、20日からホテルの駐車場で炊き出しを行い、本格的な食支援を開始した。

【南阿蘇村役場(農政課)】

村役場では、炊き出しの調理を自衛隊による支援に1本化することにした。「皆さんあのときは、一番ピークの時でだいたい3,000人ぐらいおられたんですよ。その避難所に、各会場に分かれて。(中略)私のほうは、結局避難所の方たちの人数の把握をしながら、朝・昼・晩の夕食の数を調整して自衛隊の方に教えて。」

資料で確認するとピークで2910食(朝)であった。「うちはあくまでも避難所、プラス、駐車場とかにおられる方たち全員の食事を提供したちゅうかたちで。こちらは、全部、避難されて駐車場とかに寝泊りされている方たちの食事を出します。」(農政課M氏)

村の人口は約 11,000 人(2016 年 8 月現在 11,287 人)⁴⁾であるので、4 分の 1 から 3 分の 1 の人たちに食支援を行ったことになる。

<調達>

食材については、まず政府から米の支援があった。「16 日の日に農水省に言って備蓄米を要求したんですよ。もう 17 日には到着しましたんで。1 回目は 4,500 キロ頼みまして、これは玄米だったんですよ。で、発電機で、うち地元の第 3 セクターが精米機を持っているので、それで目いっぱい回してたんですけど。やっぱり調子が悪くなったりしてちょっと苦労してたので。19 日にすぐ第 2 回目の備蓄米の要求をしまして。そしたら、無洗米を送ってくれたんですよ。無洗米はすごく使い勝手がよくて、自衛隊さんもすごく使い勝手が良かったので、ずっと無洗米を中心に先に使っていたというかたちです。」(農政課 K 氏)

始めのうちは「白いご飯というかたちと、ちょっとお味噌汁とか漬物を付けて」(農政課 M 氏)であった。ところが、日頃豊かな食材に恵まれている地域ということもあり、「だんだん避難所の方も、おかずが 1 品欲しいなあ」(農政課 M 氏)ということになった。

そこで、農政課では調達に苦心するようになる。片端から電話をかけて手配を試みるが、「やっぱりどこでも一緒な状況じゃないですか。やっぱ、市内も、熊本市内もそういう状況で被災にあわれてるところがあるし。その調達がまず、どこに掛けても、駄目です、駄目です、というかたちです。やっとなんか見つめて、どがんかこがなかで。それが一番大変だったと思います。」(農政課 M 氏)

協力したのは熊本市内の大手の業者である。自衛隊の炊き出しは炊飯車による炊飯および、ボイル加熱によるものであったので、ボイルできる商品を取りに行くことになった。「結構ボイルでできる商品いっぱいあるんですよ。そういったのを熊本に大きな業者がおりますので、そこからわれわれが走って取りにいった。で、持ってくる。物流が止まっているので、われわれが足を運んでいくしか方法がなかったんですよ。」(農政課 K 氏)「保冷車も借りて行っていたんですけど。後から、冷凍食品ではありますけど、3 日分とか、2000 食単位で、保冷車に荷物をいっぱい積んで、山道を走るのも大変で。で、荷物もいっぱい入るやつがいい、というんで、2 トンダンブも手配して。」(農政課 A 氏)

主要道路である国道 57 号は使えないため、通称「グリーンロード」という広域農道で、山中の急峻なカーブが多い道路を通して熊本市へ出た。朝夕に濃霧が発生して視界が真っ白に遮られる危険な道路である。被災箇所が多数あるため迂回しながら運転した。「最初のうちは毎日行ってきましたね。1 日 1 往復。半日かかります。益城町さんとか、かなり被災されて。けっこう凸凹の道を通ったり。通れない道があるので。最初に通った人が、このルートで行った方がいいよ、というのがずっと、もう、

毎日交代で買い出しに行ったんで。」(農政課 A 氏)「いちばん最初は道が壊れた状態。もう命がけのコースで調達だったよね。」(農政課 M 氏)

食材だけでなく、始めは使い捨て容器や箸を仕入れなければならなかった。「器もいりますよね。器も買わなきゃなんないし、箸も買わなきゃなんないしということ。」(農政課 K 氏)

K 氏によると、汁物を運ぶのに厚手のビニール袋を用いたが、それを運ぶのに使うクーラーボックスを、一度配送先の避難所に置いておかなければならないので、次の食事のためのクーラーボックスも必要になった。そうした容器も何店舗も回って揃えなければならなかった。

炊き出し調理のために「味噌・しょうゆの調味料からすべて」(農政課 K 氏)購入した。「明日の昼飯がないとかいうのもあったんですよ。で、今日夜までに走らんとというような、もうギリギリの状態で綱渡りをしてたような感じ。」

<メニュー作り>

このような調達の苦労をしながらも、農政課の職員は食事内容の改善に努力を始める。

「おにぎりだけだったんですけど、おにぎりに、味噌汁。それに副菜が付いて、野菜に代わるような、ポテトサラダとか、ゴボウサラダとか、いろんな、ちょっと試行錯誤しながら、バランスを取りながらね、考えたところもあったよね。」(農政課 M 氏)

M 氏によると「偏るわけにもいかないし、肉ばかりやらいけない」ので、おかずに苦労した。そこでメニューを作った。生野菜が不足したので朝は必ず野菜ジュースを付けた。

「定期的に野菜が保存できなかったですもんね。冬場だったら結構日持ちするんですけど。ちょうど定期的に梅雨場とかいうか。だから 1 週間もすればもう腐ったりとか、根が出たりとか。」(農政課 I 氏)

「それで、仕入れるものが増えてきたんですよ。で、朝はパン。パンだけだったのを、パンに野菜ジュースをつけます。じゃあ、昼はご飯に漬物に汁物にプラス主菜をつけましょうということで、ハンバーグであったりとか、そういうボイルでできるようなやつ。ボイル処理できるような。夜も同じようにボイルでできるものを 1 つ。プラス何か副菜じゃないですけど。ヒジキとか、キンピラとか、マカロニサラダとか、ポテトサラダとか。そういうのを既製品のやつが冷凍でありますので、そういうのを現場でちょっとずつ分けて食べてもらう。」(農政課 K 氏)

「メニューが大変だったですね。やっぱ、ある程度 1 週間のメニュー見ながら、肉・肉・肉じゃいかんけん、やっぱ、肉・魚・魚とか。何か塩麴に漬けた塩サバとか。何かそんな感じで、いろんなかたちで調達していただいでですね。」(農政課 M 氏)

以下は実際の自衛隊炊き出しメニューである。

表2 自衛隊による炊き出しメニュー（資料提供：南阿蘇村農政課）

自衛隊食事 *ジュースは野菜ジュース					
月日	曜日	朝	昼	夜	備考
4月20日	水	レトルト	おにぎり+みそ汁	おにぎり+すまし汁	
4月21日	木	パン	おにぎり+オニオンスープ	おにぎり+スープ	
4月22日	金	パン	おにぎり+大根と人参の味噌汁	おにぎり+スープ	
4月23日	土	パン	おにぎり、さばみそ煮orオムレツ、すまし汁、なます+オレンジ、ミニトマト	豚丼、さつま芋味噌汁、ポテサラ	長陽庁舎(昼)香川うどん(うどん)下野(昼)うどん組合
4月24日	日	パン+ジュース*	おにぎり+ビーフステーキ+コンソメスープ	おにぎり、オムレツ、ごぼうサラダ、あおさ味噌汁	久木野社協(昼)うどん組合
4月25日	月	パン×2+ジュース	おにぎり+カレー+とろろスープ	おにぎり+ハンバーグ+大根からいもニンジンスープ+マカロニサラダ	久木野社協・久木野総合センター・陽ノ丘荘3カ所各あり
4月26日	火	パン+ジュース	おにぎり+ (ごぼう、里芋こんにやく) ケンちゃん汁+チキンステーキorハンバーグ	おにぎり+味噌汁+フランクフルト+ごぼうサラダ	
4月27日	水	パン+ジュース	牛丼+(あおさ、こまつな)味噌汁	カレー+(エリンギ、玉ねぎ)コンソメスープ+ポテトサラダ	下野公民館閉鎖
4月28日	木	パン+ジュース	おにぎり+ミニコロオムレツ+(たまねぎ、さつまいも)味噌汁	おにぎり+和風ハンバーグ+マカロニサラダ+(じゃがいも、ニンジン)コンソメスープ	久木野総合センター閉鎖
4月29日	金	パン+ジュース	おにぎり+筑前煮+汁もの(小松菜、じゃがいも)	おにぎり+さば塩焼き+昆布と根菜の煮物+汁もの(たまごとし)	
4月30日	土	パン+ジュース	おにぎり+炭火焼き鳥つくね丼+ナスと玉ねぎの汁物	焼飯+ごぼうサラダ+玉ねぎとアオサのすまし汁	
5月1日	日	パン+ジュース	おにぎり+ブリ照り焼き+玉ねぎとニンジンの味噌汁	カレーライス+ポテトサラダ+カボチャ・ピーマン・キャベツのコンソメ	
5月2日	月	パン+ジュース	おにぎり+サバの照り焼き+キャベツとネギの味噌汁	おにぎり+鶏もも肉照り焼き+チルド惣菜きんぴら+玉ネギとアオサのすまし汁	
5月3日	火	パン+ジュース	おにぎり+ミニコロオムレツ+(たまねぎ、わかめ)味噌汁	和風ソースハンバーグ+マカロニサラダ+カボチャのみそ汁	
5月4日	水	パン+ジュース	おにぎり+筑前煮+(たまねぎ、アオサ)味噌汁	鮭甘塩焼き、切干だいこん+玉ネギとニンジンコンソメスープ	
5月5日	木	パン+ジュース	カレーライス+ジャガイモとアゲのみそ汁	おにぎり+チンジャオロース+レンコンキンピラ+サツマイモのみそ汁	
5月6日	金	パン+ジュース	粗挽きハンバーグ+ジャガイモ玉ねぎのコンソメスープ	焼飯+ごぼうサラダ+ワカメスープ	
5月7日	土	パン+ジュース	筑前煮+けんちん汁風味噌汁	カレー+ポテトサラダ+ワカメと麩のみそ汁	
5月8日	日	パン+ジュース	*ホテル キャッスルによる弁当・煮込みラーメン・カップケーキの配食	チンジャオロース+おかずひじき煮+ひじきと野菜の彩り煮+豚汁	
5月9日	月	パン+ジュース	さば味噌煮+かき玉汁	牛丼+れんこんおから煮、おふくろの味うま煮・椎茸の含め煮+豆腐とワカメの味噌汁	
5月10日	火	パン+ジュース	筑前煮+里芋の味噌汁	粗挽きハンバーグ+たけのこ土佐煮+大根のすまし汁	
5月11日	水	パン+ジュース	中華丼+コンソメスープ(ジャガイモ・玉ねぎ)	さば味噌煮+マカロニサラダ+ワカメと厚揚げの味噌汁	*5/11(水)限りで自衛隊撤退、5/12(木)朝食分までの配送業務を含む。
5月12日	木	パン+ジュース	商工会婦人部による弁当	商工会婦人部による弁当	*朝食は事前に14日分までを発注済みのため、パン・ジュースを支給
5月13日	金	パン+ジュース	商工会婦人部による弁当	商工会婦人部による弁当	*朝食は事前に14日分までを発注済みのため、パン・ジュースを支給
5月14日	土	パン+ジュース	商工会婦人部による弁当	商工会婦人部による弁当	*朝食は事前に14日分までを発注済みのため、パン・ジュースを支給
5月15日	日	パン+ジュース			
5月16日	月	パン+ジュース			
5月17日	火	パン+ジュース			
5月18日	水	パン+ジュース			
5月19日	木	パン+ジュース			
5月20日	金	パン+ジュース			
5月21日	土	パン+ジュース			
5月22日	日	パン+ジュース			

日を迫うにつれメニューが充実していることがわかるが、「それでも野菜不足」（農政課 K 氏）であった。農政課によると、この地域は夏秋地域なので、夏・秋に収穫が多い。畑は作付の前の時期であったため生野菜が手に入らなかった。また、熊本県から乾燥野菜の商品が都内に出回っているが、これらは地元ではあまり流通していなかった。

被災者からは「野菜が一番声は大きかった」（農政課 M 氏）。K 氏によると自衛隊は根菜類しかスープには入れないということであったため、「もうジャガイモとかタマネギとかニンジンとか、使えるものはなるべく入れていただく」依頼をした。「リクエストがあればわれわれも調達に、タマネギを調達に行ったりとかもしましたね。」

従って、メニューには野菜が沢山入った味噌汁やコンソメスープが多く登場した。

<要配慮者に関する課題>

M 氏によると、自衛隊が作るおにぎり（しっかり握るものではなく、ポリ袋に入れて、その上から簡単にまとめる程度のもの）に対して、「やわくしてください（柔らかくしてください）」という要望と、「おにぎりではなく、タッパーに入れてください」という要望があったという。M 氏はこれらの要望について、高齢者のために柔らかいご飯の希望があったか、配送先で手を加えていた可能性があると考えている。

K 氏によると、支援物資の中にレトルトカレーがあり使い勝手が良かったが、子どもには辛く、「ちょっと甘口はないのか」という要望もあった。だが調整することはできなかった。M 氏は、それが課題であると述べている。「地区の子どもの情報も聞いて、何食・何食というかたちでできるといいんですけども。」現実には、「何千人ボーンと来とるけん、もうつくって食べさせなん、つくって食べさせなんという。朝飯を配送したら、もう昼飯をつくるというような状況」であったため、とても余裕がなく対応ができなかったと述べている。

【ボランティア組織】

上述のように、T 氏は、福岡のおにぎり隊によるおにぎり、およびパンを 19 日から 5 月 23 日まで届けたと述べている。これらの食支援は、村役場が対応していた避難所の外の被災者に対して行われた。

「行政ができない支援を僕はやろうということで」老人ホームなどの高齢者に対する支援や農業支援なども始めた。

T 氏は、「一番大変だったのは、家が助かってるが、ライフラインが途絶えたところの人たち」と述べている。ご飯だけをもらいに避難所には行き辛く、支援が受けられないからである。

「外の人たちのほうがもう困つとるわけですよ。それがなかなか、家壊れてないから避難所に行けないと。本当は行っていいんですよ。行ってご飯もらってもいいんですよ。ライフラインが一切止まってるんだから。（中略）それがおかしいと僕は言うんですけど。もうライフラインが止まった時点で、避難所に生活する人も外にいる人も一緒なんですよ。阪神淡路のとき全部そうでしたから。そんなもん、分け隔てはできなかったですよ。」

そこで T 氏の組織は「そういう買いものに行けないようなお年寄りがたくさんいるところで、物資があったら同じように、避難所と同じように」支援を行ったと述べている。

5 月 23 日～（避難所の閉鎖）

【南阿蘇村役場（農政課）】

自衛隊の協力による炊き出しは約 1 か月継続し約 7 万食が提供された。「もうある程度、物流も車も、インフラも来たということで、自衛隊のほうから、もうある程度できたから、もうインフラもできたんだからということで」（農政課 M 氏）終了することになった。

自衛隊からは「地元の商工会のほうにお願いしたらどうですかというご意見をいただきながら」（農政課 M 氏）、5 月 12 日より、食支援は商工会に引き継がれ、弁当に切り替えられた。残った支援物資は商工会に渡され、弁当の食材として使用された。

5 月 22 日を最後に、大津町の避難所等一部を除き、避難所は閉鎖となった。

【ホテルグリーンピア南阿蘇】

ホテルグリーンピア南阿蘇には 16 世帯の被災者が滞在することになった。みなし仮設住宅の一種である。

「被災者の受け入れというのは、ごく最近でございます。（地震が発生してから）1 か月過ぎましたあたりから。まだ、半月少々しか。具体的には、村からの斡旋で。本館にもいらっしゃいます。あと、渡り廊下の先の別館と。離れのコテージと、分散して。（中略）避難の方のご負担はない形で」（ホテルフロント男性）

「朝は（朝食に）来ますね。昼は少ないですね。働いている方もいらっしゃるでしょうから。おじいちゃんおばあちゃんとかが、平均で 15 人ぐらいしか来ないんじゃないですか、昼は。夜は大体ほとんどいますけど。40 人とか来ますけれど。昼は大体 10 人、15 人とか、それくらいで終わっちゃいますね。朝はバイキングなので数は取ってないんですけど、そちらも来られているはずです。」（ホテル管理者男性）

費用は村が負担しているが、料金は安くしているということであった。上記のように、朝食と夕食を利用し、日中は仕事や学校等で出かけている人が多い。滞在者の数はなかなか減らず、7 月でも 13 世帯が残っていた。

4. まとめ

南阿蘇村では異なる立場でのエスノグラフィーを記録したが、被災直後は村が以下のような状態であったことがわかる。

- ・停電が 7 日間続いた
- ・水源が沢山あり、汲みに行くことができた
- ・プロパンガスであった
- ・米を持っている人が多かった
- ・道路が被災して物流が滞った

この地域では調理に必要な水とプロパンガス機器による熱源があった。そのため料理長が滞在していたホテルでは、普通の食事に近い食事を取ることができた。このホテルでは水を汲み上げるポンプが電動であり、ガス設備の弁が電気弁であったため、水が出ず、そのガス設備が使用できなかった。経営する会社が村からホテルを引き継ぐ際に非常用発電施設をカットせずに維持管理していた場合は、被災状況はより改善されていたと考えられる。

また、記録にあるように、農業地域であるため、米を

持っている家が多く、職員や避難者が自宅から持ち寄るということをしている。村役場農政課では、自宅にいた人でも、炊飯し、漬物や味噌汁程度には食事ができる人が多かったと考えている。

しかし、村役場農政課 M 氏が述べているように、ご飯に漬物、味噌汁だけの食事が 2、3 日もすると、あと 1 品欲しくなるのである。これらの記録は備蓄および備蓄内容の重要性を物語っている。主食ばかりに偏って備蓄をしていると栄養が偏るだけではなく、そういった単調な食事に耐えられなくなって来るということが明らかになっている。副食系の物資が必要であり、備蓄していなければ支援物資として提供を受けるか、自力調達を迫られることになる。

主要道路をはじめ各所の道路が被災して通行ができなくなったため、村は孤立しただけではなく、物資が入らなくなったために、炊き出しの物資を自分たちで調達に出かけることになった。調達では、食材に加えて調味料、容器等の資材から購入しなければならず、危険な状態の道路をトラックで搬送する日々となった。

また、ボランティア組織の T 氏も、避難所の外での買い出しについて述べており、村内では自動車の運転ができる人が自力で調達していたことがわかる。

物資調達には、主として 2 つのルートがあった。ボランティアや在宅の被災者の多くは、大分県日田市から農免道路で小国まで行き、122 号線に戻り、阿蘇市に入るというルートを使用した。村役場は熊本市へ出るグリーンロード（阿蘇南部広域農道）を使用した。いずれも被害の甚大な箇所では迂回しながら時間をかけて通行した。これらの道路が使えなかった場合には物資調達の途が閉ざされた可能性もある。

避難所の食支援の形としては、被災直後は行政とボランティアが協働で行い、1 週間後に電気が回復して来ると、自衛隊の炊き出しに一本化され約 7 万食が提供された。村役場農政課によると、避難所に滞在していた被災者だけではなく、駐車場に寝泊りしていた人などを含めて食事を提供していたが、ピーク時で約 3000 食であり、村の人口の 4 分の 1 から 3 分の 1 となる。上記の広域農道をトラックで搬送して物資を調達して「ぎりぎりであった」（農政課 K 氏）というから、この量が限界であったと考えられる。

これまでの大規模災害と同様に、食支援は避難所内および駐車場、取りに來られた人までに限られた。自宅が無事でもライフラインが止まり生活が困難であった人、自動車で調達ができなかった人は、隣近所の人やボランティアの支援を受けるか、ホテルの売店の女性のように、親戚を頼って村を離れた。

村役場農政課はメニュー作りの努力をしたが、自衛隊により一斉に炊き出す方式としたため、高齢者や子ども向けの食事といった課題に気付きながらも、対応することはできなかった。

この方式について、農政課 K 氏は「ある程度回りよったですよ。」と述べている。一方、M 氏は、「（良し悪しは）どちらとも言えないんじゃないかなと」述べている。「もう、できたのを食べなさいというかたち。やっぱ、要望を聞くと、やっぱだんだん人間ちゅうといけないけども、慣れてくると、『あれも欲しい』『これも欲しい』となってくるんですよ。そこまで聞き出したら、どこまで聞いていいのかというのものはっきり言って出てくるし、断ったら断ったで『何で出さないのか』というところもあるんですよ。」と述べている。災害が一段落す

れば、平常時の多くの要望はすぐに頭を持ち上げてくることがよくわかる。

今後の課題

南阿蘇村の記録からは、備蓄倉庫を持たない地域では備蓄倉庫について優先的に計画するべきであり、特に食料の備蓄内容の検討が重要であると考えられる。

また、宿泊施設等での非常用発電設備についても初期の被災時の状況を改善できる可能性が示されているので設置を検討することが重要であると考えられる。

また、一般的な被災対応として、被災生活が短期間で終了しない場合は備蓄だけでは不足するため、地理の諸条件に基づき、調達について検討することが必要である。被災地域と外界を結ぶ主要道路が破壊されても、物資を搬送できるルートを検討することが重要であると考えられる。また、自動車に限らず搬送手段の確保についても検討するべきであると考えられる。南阿蘇村では、村内で保冷車を確保したりトラックの手配ができた（農政課 M 氏）が、全国何処でも同様に確保できるとは限らないのである。

謝辞

本調査は地域安全学会「災害時食料供給研究会」小委員会による被災地における実態調査の一部として行われたものである。

エスノグラフィーテキストの分類では、新潟大学の別府茂先生の分類項目を使わせていただいた。ここにお名前を記して感謝を申し上げる。

参考文献

- 1) 気象庁ホームページ．平成 28 年報道発表資料．平成 28 年 4 月 14 日 21 時 26 分頃の熊本県熊本地方の地震について．14. 04. 2016.
<http://www.jma.go.jp/jma/press/1604/14a/201604142330.html> Accessed 24. 09. 2016.
- 2) 気象庁ホームページ．平成 28 年報道発表資料．「平成 28 年（2016 年）熊本地震」について（第 7 報）．14. 04. 2016.
<http://www.jma.go.jp/jma/press/1604/16a/201604160330.html> Accessed 24. 09. 2016.
- 3) 南阿蘇村災害対策本部プレス発表．平成 28 年熊本地震による対応について 4 月 23 日 13 時現在．04. 23. 2016.
- 4) 南阿蘇村ホームページ．住民福祉課．村の人口及び世帯数（2016 年 8 月 31 日）.
<http://www.vill.minamiaso.lg.jp/soshiki/4/24jinnkou.html> Accessed 24. 09. 2016.
- 5) 林春男、田中聡、重川希志依 ほか．防災の決め手「災害エスノグラフィー」—阪神・淡路大震災秘められた証言．NHK「阪神・淡路大震災秘められた決断」制作班．2009.